

原水爆禁止2008年

世界大会 報告書

広島への原爆投下から63年を迎えた8月4日から6日まで、原水爆禁止2008年世界大会・広島が広島市で開かれ、青森県から21人、三八地区からは5人の代表が参加しました。

4日の開会総会には6800人、6日の閉会総会には7500人が参加しました。5日、三八代表は、青年の広場～継承と発信～(小鹿、番澤)、原発・核燃料サイクルと核兵器廃絶(一山)、岩国・呉基地調査行動(小山)などの分科会に参加しました。

大会では、2010年の核不拡散条約(NPT)再検討会議にむけた新署名「核兵器のない世界を」にとりくむことを確認、参加者が第一署名者となり、全世界的な共同行動キャンペーンがスタートしました。核保有国に核兵器廃絶の「明確な約束」の実行を求め、すべての国の政府がすみやかに核兵器禁止・廃絶条約の交渉を開始し、締結するようよびかける署名です。八戸でも、8月9日の6・9行動(ナガサキの日行動)から、この署名を開始しました。世界大会から帰ったばかりの方も行動に参加し、市民に署名を訴えました。

※NPT Nuclear Non-Proliferation Treaty

8月22日には三八教育会館で報告会が開催され、ビデオ映像も含めた臨場感あふれる報告がなされました。その際のレポートをまとめましたので、ご覧ください。なお、国民平和大行進についても最後の方に掲載しました。

毎年開催されている国民平和大行進(6月上旬)の取り組みと原水爆禁止世界大会(8月上旬)や3.1ビキニ・デー集会への代表派遣は、多くのみなさんのご協力・募金によって行われています。代表を派遣した団体・労組に敬意を表するとともに、様々な形でご協力を寄せていただいた自治体や企業のみなさんに心からの感謝を申し上げます。

八戸原水爆禁止の会 会長 内田 弘志

連絡先 八戸市長根1-2-8 三八教育会館内県教組三八支部気付 ☎0178-43-7773

原水爆禁止2008年世界大会に参加して

青銀労組・小山隆晟

原水爆禁止2008年世界大会・広島の開会総会が4日、広島市で開かれました。総会前に広島平和記念資料館を約40分観覧し、その後広島の被爆者の方の案内で平和公園内の記念碑めぐりを行いました。知らないことばかりで、ビデオとボイスレコーダーが活躍しました。



今年は、海外代表や日本全国から6800人が参加し、

2010年の核不拡散条約(NPT)再検討会議に向けて運動を強めようと会場は熱気に包まれました。大黒作治全労連議長が開会宣言をし、冨田宏治氏(関西学院大教授)が主催者報告で、国際会議宣言の内容を紹介し、「核兵器のない世界」を目標とする全世界的な共同行動キャンペーンをよびかけました。また、現職の国連代表の初参加として注目されたセルジオ・ドゥアルテ国連軍縮問題担当上級代表は、この大会で発言する榮譽に感謝し、「核のない世界の追求に貢献することを誓い合いましょう」と表明しました。2005年のNPT再検討会議にも参加された、秋葉忠利広島市長、日本原水爆被害者団体協議会の坪井直代表委員が来賓として挨拶をされました。また、モハメッド・ラジィ・アブドゥル・ラーマン駐日マレーシア大使、ワリード・アハメド・ハッガグ駐日エジプト大使館一等書記官が挨拶しました。世界の各地で活躍している5人の海外代表(オーストラリア緑の党のスコット・ラドラム上院議員、フランス平和運動のピエール・ピラール、中国人民平和軍縮協会の王長勇・副秘書長、アフガニスタン女性革命協会のマリyam・ラウイ、米反戦労働者連合のカール・ローゼン)が「核の傘」を捨てよと発言しました。

夜の交流会は、広島名物の「お好み焼き」ということで、一山さんお勧めの「京ちゃん」へ14名で向かいましたが一山さん一押しは定休日ということで、駅前ビルの二階の一番奥で客が一人しかいなかった「縁奇縁」に決定しました。後で4名加わり結局ほぼ全員になりました。

5日は、第14・動く分科会・岩国・呉基地調査行動を希望し、希望がなかったので後日、再度勉強しながら皆さんにお知らせしたいと思います。全国各地で米軍再編や思いやり予算で米軍の好き放題のことがやられていることが判りました。

予定より1時間ほど早く終わったので3名で(後で2名合計5名)宮島まで足を伸ばしました。引き潮で草履履きの若者が歩いて鳥居の下まで行ったので、はしゃいでいる様子を望遠レンズで写真に収めました。宮島の鹿は奈良よりおとなしく、品があるように見えました。写真に仲良くおさまり?、お土産も鹿の人形にしました。この日は5人でアナゴ料理の静かな?交流会を行いました。

6日の最終日は閉会総会の前に、平和記念式典に参加というか、遠くから見学するためホテルを7時45分に出発しました。会場は思っていたよりも人は多く、温度も湿度も高く閉会総会前にもうばてぎみでした。式典には被爆者、遺族など約4万5千人が参列し、55カ国から大使などが出席しました。

秋葉忠利広島市長を先頭に献花のあと、原爆投下と同じ午前8時15分に参列者全員で1分間の黙祷をしました。閉会総会は海外代表や日本全国から7500人が参加し、2010年のNPT再検討会議に向けた新署名「核兵器のない世界を」にとりくむことを確認し、参加者が第一署名者となり全世界的な共同行動キャンペーンをスタートさせました。参加者の約半数を占めた青年たちのパワーが舞台ではじけました。横断幕や折り鶴を手にした青年が海外代表とともに舞台にぎっしり並び、会場が一つになって「平和」を意味する各国語を唱和、「平和こそ未来」と歌声を響かせました。青年たちの初々しい発言が続いた後、被爆者を代表して、原爆症認定集団訴訟全国原告団の中山高光副団長(熊本原告)は「福田総理は原告十連勝の重みを受け止め、解決への決断を」と訴え、韓国原爆被害者協会の白永基副会長とつないだ手を高く掲げ、抱擁を交わすと、参加者は大きな拍手を送りました。エクアドル、キューバ、ノルウェー、ベネズエラの政府代表が特別発言を行い、決議「広島からのよびかけ」と原爆症認定問題のすみやかな解決を要求する特別決議を拍手で採択しました。

青森県代表団は、飛行機の都合により途中で退場しましたが、私は広島での燈籠流しを体験したくて6日も宿泊なので、最後の最後まで参加してい



ました。終わって立ち上がろうとしたら体に震えがきました。汗のわりに水を補給していなかったので、熱射病かと心配しましたが、機材の整理をしているうちに落ち着いてきたのでほっとしました。18年ぶりに参加して感動したのかもしれない。今後の私自身が証明するでしょう。約300枚の写真と6時間のビデオを有効に使いたいものです。

私の次の目標日程は、3年後の長崎です。労働組合の皆さん、地域の皆さん、ありがとうございました。

核兵器廃絶。世界平和の思い新たに —原水爆禁止2008年世界大会に参加して

八戸医療生協・一山鈴夫

8月3日から6日まで灼熱の広島大会へ、こんなに蒸し暑い気候とは考えもしなかった。連日の暑さは北国育ちの前期高齢者には、きつい環境でした。今年の参加者は青森県全体で20名（2名は中学3年生）八戸から5名、参加者のうち医療生協関係者は11名でした。二十代の若い人が多く、医師、薬剤師、理学療法士、看護師など、毎朝、発行されたあおもり代表団ニュース感想文を載せるなど、積極的でした。

8月4日の大会開会式には、6800人が集まり、広島市の秋葉忠利市長、国連から今年初参加のデュアルテ国連軍縮担当上級代表や被団協代表理事坪井直氏、各国駐日大使などのみなさんから、連帯と世界平和のあいさつがありました。

8月5日、第8分科会「原発・核燃料サイクルと核兵器廃絶」に参加、核兵器廃絶は日本の国事だと思っていましたが、日本政府の公式見解は「自衛のための必要最小限度の範囲にとどまるならば核兵器を持つこと、使用することができる。しかし主として非核三原則により、現在は政策上核兵器を持っていない。」となっており、びっくりしました。憲法第九条の厳守と非核三原則（核兵器を持たず、つくり、持ち込まず）の法制化が必要と痛感しました。この分科会には原発のないノルウェー、稼働しているロシアやアメリカなどからの発言もあり盛会でした。

いま、平和・核問題で、国内も国外も大きな変化がおきています。憲法改正では、第九条を守ろうと反対が上回り、原子力空母の母港化が計画されている横須賀では反対の声が大きく、署名も5万5千筆です。米国では民主党が政策綱領案で初めて核兵器廃絶を掲げ、米国は核兵器のない世界をめざすと声明しています。

広島平和公園での現地ボランティアガイドさんの説明で印象に残ったことがあります。一つは、世界遺産になっている原爆ドームのことです。広島市議会で、景観上イメージが悪い、建物が傷んでいて危険として取り壊しが議論されたとき、市民はドームの補強経費の1.5倍にあたる六千九百万円の浄財を集め、現在の形に残したという。八戸にある戦跡施設の保護も考えなければと思いました。二つ目は、朝鮮戦争のとき、トルーマン米国大統領が「原爆の使用もありうる」との声明を出したとき、詩人の峠三吉らは世界的な署名運動を起こし中止させたこと、「米国大統領は署名に負けた」と言ったと言われています。峠三吉野の詩



碑「ちちをかえせ ははをかえせ…」の前で説明を受け、草の根の運動は国際政治をも動かす、私は微力、非力ではありますが、無力ではないと実感しました。

八戸医療生協の竹本理事長は、青森県内の原爆症外来担当医として県内80名、県南21名の方々を診察しております。「私の病気を原爆症として認めて」と集団提訴し、地裁・高裁で十回勝訴していますが政府は認定していません。総理の政治決断が求められています。

広島参加の際、医療生協デイケアの通院者や一中支部総会時に折ってもらった平和祈念の折鶴290羽を持参しました。また、関係各位から心のこもったカンパを頂き無事帰八しました。今回提案された『新署名『核兵器のない世界を』に取り組み、世界平和のためにがんばりたいと思います。

原水爆禁止2008年世界大会に参加して 県教組三八支部・小鹿道子

7月30日、八戸原水爆禁止の会の壮行会では、たくさんの激励の言葉と素晴らしい歌声に込められた皆様の温かいお気持ちをいただきました。ありがとうございました。

壮行会で、田端先生が「初めて原爆ドームを見た時、足ががくがく震えました」とおっしゃっていました。私も、原爆ドームを見た瞬間、胸が締め付けられしばらく声を発することができませんでした。6年生の国語の教科書に「平和のとりでを築く」という教材があります。今まで何度も子ども達と一緒に勉強してきましたが、実際の原爆ドームは想像を遥かに絶するものでした。

平和記念館では、原爆により体にやけどを負った方、両親を失った原爆孤児達、母親の胎内で放射線を浴びて障害を負った方々の写真があり、痛々しさが伝わってきました。

記念碑めぐりでは広島の隆杉さんがガイドしてくださいました。市立高女の原爆慰霊碑には $E=MC^2$ という原子力エネルギーの式が彫ってあった為、あちこちをたらいまわしにされたとのこと。また、点呼している時に原爆が落とされ、ほとんどの子が100メートルほどとばされ、熱くて熱く

て川に入ったが、ほとんどの子は体力がなくなり流されてしまったとのことでした。自分も教員をしていますので、その場に子ども達と居たら…と考えると、原爆の恐ろしさを改めて思い知らされました。そして、当日腹痛で欠席した二人の子が「なぜお前たちだけ生き残った」と責められたというお話から、戦争は生きている人の心まで尋常ではなくしてしまうとも思いました。

公園全体と原爆ドームは、人間が決して犯していけない過ちとして残っている世界遺産です。

原水爆禁止2008年世界大会では、広島市秋葉忠利市長による挨拶の中での「二度とこんな思いを誰にもさせたくはない」という言葉、国連軍縮問題担当のセルジオ・ドゥアルテ氏の「地球から核兵器をなくし、将来を築こうとする粘り強い気持ちが大切」という言葉が心に残りました。全国から集まった6800人の思いが結集した大会でした。草の根運動からの報告では、民医連のお医者さんの「毎日一人の命を救うためにがんばっているのに、一瞬にして何万人もの命を奪った核兵器は許さない」との言葉が胸に響きました。

8月5日の分科会（青年の広場～継承と発信～）

中学3年の娘が、青森分会から参加した同じ年の子と意気投合し「二人で同じ分科会に参加したい」とのことでしたので、もはやどう逆立ちしても「青年、とは言えない私も、周りの目を恐れずこの分科会に参加しました。「受付でランダムに小さい班に分け、班毎に移動します」とのことでした。当然「同じ班になるように頼もうね」と私が言うのと「私たちは二人で行くから、お母さんは違う班に行ってよ」と娘に冷たく言い放たれ、「だってあなたたち、知らない町で迷ったらどうするの」と説き伏せる母を尻目に「大丈夫だから」と、とっとうち行ってしまおう娘たち。残された母はしゅんと



なりながら青年たちに混じって小さくなっていると、何と青森県団の3人と偶然同じ班に。元気を取り戻した母はその後、何事もなかったように若者たちに混じって己斐町自治会館へ。ここでは3人の被爆した方の話を聞く貴重な体験ができました。

当時、女子高の教員になったばかりの檜田道子さん（当時18歳）の話から、同じく女子高の教員をしていた双子のお姉さんが爆心地付近で被爆、瀕死の重傷で帰宅したものの、「生徒たちを助けられなかった。どうにもならなかった」と言いながらその日のうちに亡くなってしまったとのこと。声を聞かなければ姉と判らないほど顔が焼け爛れていたこと、御自身も被爆されていたので「いつ原爆症になるかわからない」と怖かったことを語ってくださいました。また、川崎さん（当時12歳）は、「学校の校庭が仮設の火葬場になった。自分も死体を運んで焼くのを手伝った。まともに見ていたら気が狂いそうになり、あの頃は自分の感情を押し殺しながら暮らしていた」「原爆は一瞬で人の命を奪うと言うのは間違いです。その晩になくなった方もいるし、何ヶ月も苦しんで、苦しんだ末になくなった方もいるんだということを忘れないで下さい」「戦後バラックに一人で住んでいた中学生もいる」「やけどが治らず、人骨を砕いたものを塗ればいいと言われてそうした人も居る」と語ってくださいました。

今、一人一人の子が生き生きと学校生活を送れるように、生きる力を育てることをめざして学校でこどもたちを指導しています。自分の命、人の命の大切さをわかる子になってほしいと願いながら、子ども達と過ごしています。これでいいと満足できることは本当に僅かで、悩みながら迷いながらの毎日ですが、こうして子ども達と当たりまえのように生活を送れるのも、今が平和であるからなのだと感じました。当たり前前の幸せを改めて感じると共に、この平和を守り、核兵器廃絶への努力をしなければならないと思います。そのために、学校で私が子ども達に教えられることを少しずつ実践していきたいと考えています。

2年前は小鹿家では頭脳派の二人組（主人・長女）が参加させていただきました。今年は娯楽派二人組（私・二女）でしたが、頭脳派に負けず劣

らず得たものは大きかったと思います。

最後になりましたが、青森県団から参加された皆様方、特に八戸分団の小山さん、一山さん、番澤さんには、母娘共々大変お世話になりました。ありがとうございました。

ヒロシマをいつまでも

中学3年生・小鹿真由

私は、8月3日から6日までの3日間、父に勧められて広島に行ってきました。青森県代表として世界平和大会というものに参加するためです。その大会では、原爆が落ちた場所を見てまわったり、被爆者の話を聞いたりする予定でした。その時、私は、正直言って今の世の中が十分平和なのにど



うして今さらこんなことをするのかと、とても面倒でした。

私たちは、世界遺産に登録されている平和公園に行きました。中に入り、目の前に見えたものは、今にも崩れそうな原爆ドームでした。私はそれを見た瞬間、足がすくみ、足の下から頭の先まで一瞬にして鳥肌が立ちました。写真で見るとよりもリアルでとても怖かったです。他にも原爆資料館があり、そこには8時15分で時を刻むのをやめたポロポロの腕時計や、血のついた焼け焦げの男の子の服など、とても生々しいものばかりで、思わず目をそむけてしまいました。それらは目に焼きついて頭から離れず何かを無言で訴えているようでした。私は怖くて「どうしよう、来るんじゃない」と後悔しました。

そして、次の日、被爆者の話を聞くために、全国の人と班を組み、自己紹介などをしました。みんないい人ばかりだったけれど、私は中3とい

うことでびっくりされました。そのうちに被爆者がいる集会所に着きました。そして、75歳前後の被爆者たちが順番に話しをしてくださいました。食べ物がなくて学校は怪我をした人たちでいっぱいになり看病をしたことや、五千人分の薬が3日でなくなり足を切断するのに麻酔をしないのでこぎりで切ったこと、原爆を落とされたとき川に入ったら満潮で流され、気がついたらみんないなくなっていたことなどを涙ながらに話してくださいました。そして、「今でも自分は生きていてよかったのだろうか。」と苦しんでいる人がいることがわかりました。それらのことを聞いた後に、大阪の女の人が「今の世の中、平和だから子ども達はそれが当たり前と思っているんや。もっと原爆のことをわかってもらわなあかん」と言いました。私はこの言葉を聞いて、「ああ、自分は原爆や平和のことに対してどれほど無関心だったのか。」とショックを受けました。知っていたと思っていたことはほんの一部で、とても恥ずかしかったです。「核兵器はいけないことです。」と何の感情も持たずに言ってきた言葉の中には、20万人のとても重い命がのしかかっていることに初めて気づきました。そして、最後にみんなで平和の歌を歌いました。そのとき被爆者のおばあちゃんが涙を流して「こんなにたくさんの孫に囲まれて幸せじゃね」と笑って言ってくれました。私は、たくさん苦しんできた人たちのことを知らないで面倒なんて言ってとても申し訳なかったです。だから、貴重な話を聞いた今、(私もバトンを渡されたんだ、ここに来てよかった。)と思いました。被爆者から聞いた話は、世界中に核兵器がある今の世の中で、とても他人事とは思えませんでした。これからは、それを自分の言葉で友達や親戚に伝えていきたいです。

63年前の8月6日、広島で起こった出来事を決して忘れてはいけなとみんなに伝える為に、もっともっと平和について深くかかわっていきたいです。そして、まだ、原爆で苦しんでいる人たちがたくさんいるので、そのような人たちを核兵器廃絶という形で幸せにしてあげたいです。そして、いつまでもみんなの心にヒロシマを残していきたいです。

原水禁大会に参加して

家事従事(朝日スクリーン)・番澤伸児

今回初めて広島での原水禁大会に参加しました。アイスホッケーの県選抜のコーチに入ったため、開催前日まで北海道の苫小牧に行っていたので、二日目の分科会から参加しました。今日は、その中で感じたことを報告したいと思います。

広島に着いたのが、夜の七時くらいでしたが、まず初めに驚いたのが駅前の道路の作りでした。



路面電車が走っていたのはテレビなどで見て知っていましたが、駅前の大通りには横断歩道がなく、地下を通って抜けなければなりません。知っていれば戸惑うこともなかつ

たのかも知れませんが、初めての土地なので何も分からず、駅のすぐ近くのホテルにたどり着くまでに30分以上かかってしまいました。

無事に広島に着いて、二日目の分科会では被爆者との集いに参加しました。集いでは3人の方たちから話をしてもらいました。已斐小学校付近で、爆心地からは比較的離れた所で被爆した人たちでした。最初に話してくれた人は18歳で被爆し、姉妹で先生をしている女性の方でした。原爆が落ちた瞬間はカメラのフラッシュが全身を包み込むようだったと言っていました。なにが起きたのかも分からず、すぐ近くで焼夷弾が落とされたと思っていたそうです。みんなで山の上に避難したそうですが、1時間後に近くの住人が避難してきて、その1時間後には軽い火傷をした人やけがをした人が来て、さらに1時間後には肩や背中に大きな火傷をした人たちが避難してきたと言います。その日は姉が建物疎開のため市内の方に生徒たちと向かっていたため、心配で仕方なかったが、自分の生徒を置いていくことも出来ず、どうすることも出来ないことに、先生という職業は本当につらいものおっしゃっていました。なんとか時間をもらい、自宅に向かって走ったそうですが、その道

中は悲惨なものだったそうです。火傷がひどく、歩くことも困難な人たちが、少しでも爆心地から離れようと、少し歩いては休み、また少し歩いては休みを繰り返し、あまりに悲惨で自分が元気なのが申し訳ないと思うほどだったようです。帰ってみると、やはり、姉は大火傷を負っており、ずっと横になっていたそうです。しかし、自分がひどい火傷で苦しんでいるのに口にすることは「子供たちを助けてやれなかった…」、「あの子どもたちは今どうしているんだろう」と後悔ばかりしていたそうです。そして、その日の夜、死の間際に初めて「手がしびれる、足が蒲い、のどが渴いた」と自分のことを口にしながら、ゆっくり息を引取ったとそうです。私もアイスホッケーで小・中学生の指導をしていますので、立場は違いますが子供に関わるといった点で非常に共感するとともに、当時の無力感や絶望感が伝わってきて、とても悲しい気持ちになりました。

二人目に話してくれた方は15歳で被爆した方でした。こちらの家では、火傷して倒れている人たちを家で休ませてあげたといいます。あまりに火傷がひどく、皮が垂れ下がっている人は、家に入れる前に垂れ下がっている皮膚に食用油を塗り、皮膚同士がくっつかないようにしたそうです。また、当時は手当をするにも医療道具がまったくない状態で、冷やすものがないため、野菜を貼り付けて冷やしてあげたとも言っていました。そんな中で休ませていた人が亡くなり、火葬場も一杯だったため、小学校のグラウンドに火葬しに運んだところ、あまりにも遺体が多かったため、グラウンドを畑のように掘り、その中に遺体を投げ込み、まとめて火葬していたそうです。その方は、あまりにひどい光景に目を覆い、見ないようにしたそうです。「見るとほんとに頭が狂ってしまうんじゃないかと思った」と言っていました。

被爆者の方は、当時のことをほんとうに苦しそうに、悲しそうに語ってくれました。その姿を見ているだけで、原爆というものの恐ろしさを感じ取ることができたと思います。3人のうち2人は「原爆を語る会」に入っており、日々原爆の恐ろしさ



を語っているそうです。もう1人の方は、'最近まで語るのを拒んでいましたが、今年から少しずつ語りはじめたと言います。戦後63年経った今でも、原爆の恐怖から解放されず、未だに苦しんでいる人がいると思うと、このような兵器はたった一つでも存在してはいけないのだと痛感しました。

被爆者の方たちから貴重な体験を聞いたあとは特に決められた子定がなかったので、一人で原爆ドームと平和記念資料館を見に行くことにしました。間近で見る原爆ドームはテレビで見るのとは全く違い、広島ของきれいな街並みにはそぐわない痛々しいものでした。

平和記念資料館では、戦前の広島の街並みや、被爆後の復興の様子など、普段知ることのできない部分まで詳しく紹介されており、とても勉強になりました。また、被爆した建物の残骸や、当時身に付けていた遺品の展示を見たときに、被爆者の方から話を聞いた直後ということもあり、当時の状況を想像し、背筋の凍るような恐怖を覚えました。一人で行き、時間に拘束されなかったということもあって、一つひとつゆっくり見て歩いたら、気づいたときには入館してから2時間以上経っていました。その展示品や資料を見るたびに戦争への怒りと、悲しみが心の中でどんどん大きくなっていきました。

今回、このようにいろいろなことを経験することができ、これまでの考え方や感覚が本当に変わることができました。戦争は私たちすべての自由を奪うものです。私は、今年の5月に結婚しました。まだ、子どもはいませんが、これから子供ができ、あたたかい家庭を作っていきたいと思っています。自分の子どもたちが大人になったときに、戦争のない国にしていくために、今の憲法9条を守っていかなければなりません。私のまわりでは、同じ年代に平和について話せる知り合いはいませんが、まず身近なところから話を深めていき、そこから少しでも同じ考えを持った人を増やしていき、平和の活動に結び付けていきたいと思っています。それと、今回一緒に参加した青森の人たちとも、初対面ということも気にせず本当に親しくなり、「また来年も一緒に参加しよう」、「青森に帰った後もみ

んなで集まろう」と話してきました。今後もこの絆を大切に、情報の交換や交流を深めていきたいと思います。

最後に、今回このような器械に自分を参加させて頂いた事、本当に感謝しています。この経験を無駄にしないよう、これからの活動がんばって行きたいと思います。

原水爆禁止2008年世界大会-広島決議

広島からのよびかけ

「こんなむごいことを二度とくりかえしちゃいけない」一地獄を見た被爆者たちの叫びは、「人類と核兵器は共存できない。核兵器をなくせ」の世界の声となりました。

いまなお2万6000発の核兵器が世界の安全と平和を脅かしています。核兵器の使用は一瞬にして無数の命を奪い、世代を超えて人びとを苦しめ、文明を破壊します。

2000年の核不拡散条約（NPT）再検討会議で核保有国が受け入れた核兵器廃絶の「明確な約束」をすみやかに実行させなければなりません。2010年春のNPT再検討会議は、そのための絶好の機会です。

きょうこの場からはじまる「核兵器のない世界を—2010年核不拡散条約（NPT）再検討会議にむけて」の国際署名は、NPT再検討会議の場に積みあげて、約束の実行を力強くせまるものです。私たちは、この署名運動を軸にした国際共同行動の先頭に立つ決意です。

アメリカの「核の傘」のもと、危険な核戦略に組みこまれ、原子力空母の配備すら強行されようとしている日本で、「憲法9条が輝く非核・平和の日本」を実現していくことは、私たちの世界に対する責務です。

国連の代表をはじめ34か国99名の海外代表が参加して開催された原水爆禁止2008年世界大会は、「核兵器のない世界」をめざす政府と草の根からの運動の共同を誓いあう場となりました。この世界大会に参加した私たちは、その「国際会議宣言」をふまえ、被爆地・広島から日本全国、そして世界のすべての人びとによびかけます。

◇2010年のNPT再検討会議にむけ、核兵器廃絶の世

論と行動を強めましょう。「核兵器のない世界を」の国際署名を職場・地域・学園でただちに大きくひろげましょう。多彩な創意あふれるとりくみで、世界をつなぐ国際共同行動を成功させましょう。6・9行動をはじめ日常的なとりくみを強めましょう。国連と諸国政府に核兵器禁止・廃絶条約の交渉開始と締結を要求しましょう。

◇核兵器廃絶と「非核三原則」の厳守を政府に宣言させる「非核日本宣言」運動を各地域でさらに大きくひろげましょう。憲法9条を守りいかす国民的な行動と共同をさらに発展させましょう。横須賀への原子力空母配備反対のたたかい、沖縄はじめ全国の米軍基地再編・強化反対のたたかいをひろげましょう。自衛隊の海外派兵恒久法制定に反対し、イラクやインド洋から撤退させましょう。

◇原爆症認定集団訴訟の早期解決と認定制度の再改定を強く要求しましょう。世界各地、全国津々浦々で原爆展、被爆者の証言活動にとりくみましょう。被爆者とともに、その体験や願いを受けつぎ、次の世代と世界に伝える活動をいつそう強めましょう。被爆者とともに、若い世代とともに、力をあわせ、いまこそ行動に立ちあがりましょう。

ノーモア・ヒロシマ！ ノーモア・ナガサキ！
ノーモア・ヒバクシャ！

2008年8月6日

原水爆禁止2008年世界大会-広島



通し行進の森悦子さん・中央

原爆症認定問題の すみやかな解決を要求します

人類最初の核戦争の惨禍から63年。広島と長崎の原爆はおびただしい命を奪い、いまなお多くの被爆者を苦しめつづけています。広島・長崎の被爆者による、「国は、自分たちの病気や障害が原爆によるものだと認めるべきだ」という原爆症認定集団訴訟は、いま重要な局面を迎えています。すでに8つの地裁、2つの高裁で被爆者勝利の判決が下されました。これらすべての判決は、残留放射線の影響の無視など、原爆被害を過小評価し、切り捨ててきた従来の原爆症認定基準をきびしく批判して、被爆状況や健康状況など全体的、総合的に判断すべきだとしました。認定行政の誤りが否定しがたくなるなかで、国はついに見直しを迫られ、今年4月から新基準が実行されました。しかし、その後の判決が

示すように、これもなお被爆の実際のみあつておらず、新たな線引きを行うものです。国は、認定基準の再改定を認めず、裁判をつづけようとしています。これ以上、被爆者を苦しめることは許されません。私たちは、原爆症認定集団訴訟の早期解決と認定基準の再改定を強く要求します。

「人類と核兵器は共存できない」と訴えつづけた被爆者の声は、核兵器のない世界を求める大きな流れをつくりだしました。核兵器の廃絶と被害への補償によって、被爆者と遺族の苦しみが一日も早く癒されるよう、被爆者援護・連帯の世論と運動をさらにひろげていきましょう。

ノーモア・ヒロシマ！ノーモア・ナガサキ！
ノーモア・ヒバクシャ！

2008年8月6日

原水爆禁止2008年世界大会-広島



青森県代表团2008/8/4

2008年国民平和行進・6/5～6/7

6月5日、上十三地区からの行進が三八教育会館に到着しました。

17時45分から市内行進を行い、市庁前で引継集会を行いました。行進参加者は90人程度、集会は105人で目標としていた100人を超えました。通し行進者が東京ほくと医療生協理事の森悦子さんだったこともあり、医療生協から大挙30人の参加でした。全労働八戸職安分会も20名近い参加でした。年金者組合、新婦人も10人を超えました。



集会では、苫米地十和田市原水爆禁止の会代表が、上十三地区の行進の様子と午前の行動で基地の街・三沢市の市長と面談したことを報告しました。八戸原水爆禁止の会の内田会長が歓迎のあいさつを行い、通し行進の森さんも元気なあいさつでした。八戸市長・市議会議長のメッセージ、八戸市における平和と原水禁運動の重鎮である近藤三男さんの特別発言があり、最後にみんなで「原爆を許すまじ」をうたいました。なお、市議会議長のメッセージは初めてですが、議会が「非核平和都市宣言」を採択していることを説明し、核兵器廃絶の前進を訴えるものでした。

その後三八教育会館に移り、通し行進者の歓迎・交流集会を行いました。森さんは通し行進を決意した訳や体の状況、北海道での行動などを丁寧語りました。集会でも伴奏したうみねこ合唱団が4曲も歌って



下さいました。こちらの参加者は26人でした。

6月6日は、早朝は強い雨が降っていたので心配でしたが、集合のころは弱まりはじめ、歩き始めたらやみました。無事当初予定の司法センターまで歩くことができました。行進は30名超程度でした。出発前に、市長と市議会議長から賛助金をいただくことができました。前述の通り、八戸市議会は「非核平和都市宣言」を採択しているのですが、その決議文が市議会前の壁に掲げられていました。森さんが写真を撮りました。次に、南部町と三戸町を行進しました。参加者は23人でした(車5台で移動)。

南部町では副町長と面談しました。森さんは、核兵器廃絶について訴えつつ、特産品など地域のことを色々質問していました。三戸町では総務課長が応対し、私たちの訴えに共感を示していました。両町とも賛助金の協力をいただきました。行進団は三戸で解散しましたが、森さんと事務局メンバーが田子町を訪

問しました。田子町では町長とお会いすることができました。なかなか商売上手な方のように、修学旅行で中学生・高校生が訪れ、農業体験で感動していくことや有名な田子ニンニクの食べ方なども語っていました。賛助金もいただきました。

6月7日の日程は、行進を三戸町から岩手県・二戸市につなぐことです。

13時に三戸町役場を出発した行進団は25人で、医療生協、全労働、全司法、青銀労組、新婦人、年金者組合、コープあおもり、平和委員会、生健会、県国公の方々が参加していました。地元の大向町議も、例年の通り、先頭で行進しました。行進は町外れまでで、青岩橋は車で越え、金田一温泉駅前から行進を再開しました。駅前到着が予定より早かったのですが、駅前の岩手行進団から歓迎の拍手をいただきました。

集会では、まず平和行進実行委員会のリレー旗とイギリス平和行進のオルダーマストン連帯旗が引き継がれました。労組・団体旗もそれぞれの団体・労組のメンバーから引き継がれました。岩手、青森の双方からのあいさつとエール交換の後、通し行進の森さんが涙ぐみながらあいさつしました。三八での三日間の行動がよい思い出になったようです。実は、7日の午前は時間があいたので、蕪島と種差海岸を案内したのですが、蕪島ではウミネコの群舞とヒナを守ろうとする鳴き声にびっくりしたようです。大須賀海岸の砂丘も元気に歩き、種差の芝生に感動していました。私自身も、毎日、朝食のときに指の血液を採取して血糖値を測定している森さんの姿を見て、タフな心に感動しました。

なお、平和行進を終えた後、五戸町、新郷村、階上町を訪問し、それぞれ賛助金をいただいています。三八地区の全市町村と八戸市議会からのご協力でした。ありがとうございました。



世界大会壮行会7/30